

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16H03505

研究課題名(和文) アイヌ文化形成史上の画期における文化接触 - 擦文文化とオホーツク文化 -

研究課題名(英文) Cultural contact in the formation period of Ainu culture - Satsumon culture and Okhotsk culture -

研究代表者

熊木 俊朗 (KUMAKI, Toshiaki)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：20282543

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：アイヌ文化形成史上の画期とされる擦文文化中期(9世紀末頃)に生じていた社会変動の背景を解明するため、北見市大島2遺跡にて擦文文化の竪穴住居跡の発掘調査を実施した。この遺跡では過去の調査で立地や生業、儀礼等に特異性が認められており、その背景の考察に重点を置いて発掘を実施した結果、遺跡からは竪穴住居の廃絶儀礼の痕跡が高い頻度で確認された。一方で、特異性の原因として想定されてきたオホーツク文化からの影響についても、建築材の選択などの点に確認された。これらの点から、擦文文化中期の社会変動においては、オホーツク文化からの影響を従来より多く見積もる必要があることが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、擦文文化後半期の集落遺跡の発掘調査を通じて、当該期における居住形態や儀礼の具体像を明らかにし、その系譜について検討した。近年の日本史学では、日本列島の北方史における転換点が古代から中世への移行期にあることが指摘されているが、本研究ではアイヌ文化の成立直前期に相当する擦文文化後半期における居住形態や精神文化の分析を通じて、この転換点における社会変動や、オホーツク文化など周辺社会との交流の内容を明らかにした。これは考古学のみならず、古代から中世の日本列島を含めた東北アジア全体の歴史研究に資する成果と言える。

研究成果の概要(英文)：In order to elucidate the background of the social changes that occurred during the middle period of the Satsuma culture (around the end of the 9th century), which is considered to be an epoch in the history of the formation of the Ainu culture, we conducted excavations of the settlement of the Satsumon culture at the Oshima 2 site in Kitami City. As a result of the excavation, traces of pit dwelling abandonment rituals were frequently found at the site. On the other hand, the influence of the Okhotsk culture, which has been assumed to be the cause of the peculiarity, was confirmed in the selection of building materials and other aspects. Thus, this study shows that it is necessary to estimate the influence of the Okhotsk culture on social changes during the middle period of the Satsumon culture more than before.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 擦文文化 オホーツク文化 アイヌ文化 北海道

## 1. 研究開始当初の背景

日本列島の北方史における大きな転換点が、10-13世紀、考古学では擦文文化の後半期から中世アイヌ文化への移行期にあることが、近年の研究で指摘されてきた。しかし、最近の研究では、それより僅かに早い時期の9世紀末(擦文文化中期)に生じた、オホーツク文化と擦文文化の融合という文化接触に対しても注目が集まっている。それは、この接触がロシア極東やサハリンを含めた広域的な交流の発展を促進し、それまでの交易体制や社会構造を大きく変化させたと考えられているからである。

研究代表者もこのような研究動向を意識しながら、この時期の日本列島とアジア極東地域の北回りの交流をテーマとする考古学研究に取り組んできた。最近では平成23-27年度の科研費基盤研究(B)「擦文文化期における環オホーツク海地域の交流と社会変動」の助成を受け、北海道東部の北見市大島2遺跡で擦文文化集落の発掘調査を実施し、擦文文化後半期の居住形態・生業・儀礼などの実態と、そこに認められるオホーツク文化からの影響について研究を進めてきた。その結果、オホーツク文化と擦文文化の接触と交流は従来考えられていたよりも緊密で、長期間かつ広域にわたって関係が継続していた可能性が考えられたが、その実態解明には、擦文文化後半期の遺跡発掘等による、さらなる調査研究が必要であった。

## 2. 研究の目的

上記の背景と経緯を踏まえ、本研究課題では、擦文文化後半期の社会構造の変動について、特にオホーツク文化との交流とその影響に注目しながら、その実像と背景を考古学的に解明することを研究の目的とした。具体的には、擦文文化の社会構造と居住形態の研究と、擦文文化とオホーツク文化の接触の実態とその影響の解明、という二つのテーマを設定し、アイヌ文化形成史上の画期における文化接触と社会変動の実態解明を考古学の立場から試みることにした。

## 3. 研究の方法

擦文文化後半期の社会構造と居住形態の様相を具体的に明らかにするため、北海道北見市大島2遺跡にて擦文文化集落遺跡の発掘調査を行った。本遺跡は、海に面した高位段丘上という特異な場所に立地しており、生業や他地域との交流に関して、周囲の集落とは異なる性格を有すると考えられる重要な遺跡である。本遺跡では、平成22年度より代表者が所属する東京大学常呂実習施設が発掘を開始しており、擦文文化後半期の焼失住居跡を含む集落遺跡であることが判明していた。この調査を継続するかたちで、本研究課題では竪穴住居跡の発掘調査を実施し、出土資料の分析を行った。

調査は本研究課題の各年度の8月から9月にかけて、常呂実習施設を拠点として実施した。出土遺物のうち、炭化木材や土器付着炭化物については樹種同定や同位体比分析を行ったが、これらの自然科学的分析については連携研究者の協力を仰いだ。

発掘調査と併行して、大島2遺跡の調査成果を他の資料と比較検討するために、基礎資料となる他の遺跡の擦文文化やオホーツク文化のデータを収集した。データの収集方法は、刊行されている発掘報告書を資料としたほか、常呂実習施設が所蔵するオホーツク文化の未報告資料や、北海道内やロシア極東の関連資料についても現地で資料調査を行ってデータを得た。このうち、特にロシア極東の関連資料については研究分担者が調査を担当した。

## 4. 研究成果

### (1) 発掘調査の概要

大島2遺跡の発掘調査では、3号竪穴と4号竪穴の、2軒の竪穴住居跡を完掘した。竪穴の時期は出土土器からみてどちらも擦文文化後期～晩期(紀元11世紀後半～12世紀前半)である。3号・4号とも廃絶時に火を受けた焼失住居であり、土器などの遺物に加えて、住居の構造材とみられる炭化した木材、茅等が出土した。

3号竪穴は1辺約6m前後の小型の竪穴住居跡で、カマドが1基付設されていた。遺物はカマド付近から擦文土器、環状の土製品、鉄製刀子が出土したほか、竪穴埋土からは黒曜石の剥片等も出土している。

4号竪穴は1辺約6～7m前後の竪穴住居跡で、2基のカマドと1基の炉が付設されていた。遺物は擦文土器、紡錘車、片口付きの皿状木製品などが出土している。

以下に、大島2遺跡の調査成果の詳細について項目別に述べる。

### (2) 竪穴住居の構造について

大島2遺跡の3号竪穴と4号竪穴は焼失住居であり、建築材とみられる炭化材が検出された。出土量はそれほど多くはなかったため、特に住居の上屋の構造に関しては得られた情報がやや少なかったが、柱穴の配置やカマドなどのデータも踏まえて検討した結果、住居の構造について以下のことが成果として得られた。

### 炭化材の出土状況と住居の上屋構造

3号竪穴の柱穴は、4本の主柱穴が竪穴の四隅に近い位置にあり、横長の長方形を呈する配置となっていた。この柱穴の配置は上屋の構造が切妻であることをうかがわせるが、一方で屋根材とみられる炭化材は寄棟を思わせる配置で出土しており、柱穴の構造と炭化材の出土状況の間に矛盾が認められた。この矛盾は、竪穴住居の復元に関する従来の研究に対して新たな課題を提起することになった。

4号竪穴では、屋根の垂木とみられる炭化材が、住居の壁と直交する方向に20cm弱の間隔を空けて等間隔に並ぶ様子が確認された。これは、寄棟とみられる上屋の構造を具体的に示す重要な痕跡として評価された。

### 竪穴内の空間分節

3号竪穴、4号竪穴ともに、壁沿いに並ぶ小柱穴の配置から、竪穴の隣り合う二辺の壁沿いにL字形を呈するベンチ等の構造物が付設されていたことが推定された。さらに4号竪穴では、ベンチ等に該当する位置の床に段が設けられており、空間分節の存在が強く示唆された。また、3号・4号竪穴ともに、ベンチに相当する部分の床面の一部において細い丸木材が簀の子状に密着して並べられた形で検出された。これは、竪穴床面のベンチ状部分の具体的な利用形態を示すものとして注目される。

竪穴の隣り合う二辺の壁際にベンチ等の構造物をつくるという空間分節のあり方は、過去に本遺跡で実施された1号竪穴・2号竪穴の調査でも確認されているが、今回の調査で、それらの方向に二つのパターンが認められることが明らかになった。すなわち、1号と3号（ベンチは北と東）、2号と4号（ベンチは北と西）で向きが共通しており、このことは集落の変遷過程や構造を考える上で重要な手がかりになると考えられた。

### カマドの改築と構造

3号竪穴のカマドでは改築が確認された。擦文文化でカマドの改築が確認された例は非常に少なく、その理由や背景が注目された。特に、トビニタイ文化の遺跡で同様の例が確認されている点は注意される。

カマドに関しては、特徴的な構築方法も注目された。4号竪穴の西カマドでは、カマドの構築材となる粘土の中に芯材とみられる細い炭化材が格子状に組み込まれた状態で検出された。同様の方法は、この遺跡の2号竪穴や近隣の北見市岐阜第二遺跡でも確認されているが、常呂川下流域以外では検出例がなく、その特異性が注目される。なお、木製の骨組みないし型を用いてカマドをつくる方法は樺太アイヌの民族例でも確認されており、それとの関連も注目された。

## (3) 住居の廃絶儀礼について

### 焼失住居の出現率

大島2遺跡においては、今回、調査した2軒の竪穴のほか、過去に調査した2軒と、現在調査を継続中の1軒の、合計で5軒となる全ての竪穴が焼失住居であった。擦文文化の竪穴住居跡における焼失の割合は全道平均で15%前後とされるが、常呂川下流域の調査例をみると、常呂川を挟んだ東西の地点間で出現率に差がみられる。すなわち常呂川以西では全道平均以下であるのに対し、大島2遺跡を含む常呂川以東では40%以上の高い出現率となる。このような地点差の背景は今のところ不明であるが、焼失という現象がもつ意味の解釈、すなわち、いわゆる「家送り」などの儀礼的行為とみなせるか否かとあわせて、今後の検討課題となることが明確になった。

### カマドの廃絶時もしくは竪穴廃絶時の儀礼

3号・4号竪穴ではいずれもカマド廃絶時もしくは竪穴廃絶時に行われたとみられる儀礼の痕跡が確認された。3号竪穴では、カマドの上部から3点の環状土製品が、カマド旧煙道の入口部前では刀子が出土しているが、これらはカマド廃絶時に行われた儀礼的行為の痕跡と判断された。環状土製品は他に類例のない粗雑なつくりのもので、実用具や装飾品ではなく、儀礼の際に即興で製作されたものと判断された。4号竪穴では西カマド出土土器の内部で片口付きの木製品が出土した。この木製品は出土状況から、カマドにかけられていた土器内に入れられて土を詰められた後、住居の廃絶時に火を受け、炭化した部分が遺存したものと判断された。これは、カマドにかけられた土器に遺物を埋納するという儀礼的な行為が行われていたことを示すとみられた。

カマドないし住居の廃絶時の儀礼の痕跡は、この遺跡の1号・2号竪穴でも検出されているが、このような検出率の高さは、焼失住居の出現率とともに本遺跡を特徴づける点であることが明らかになった。これらの儀礼で注目されるのは、儀礼で用いられる遺物が同一ではなく、各例で様々な点である。その理由としては、同じ行為を繰り返さないことを意識していた、その時々で身近にあったものを即興的に利用していた、等々が考えられるが、特定は難しいのが現状である。いずれにしても大島2遺跡の各例は、擦文文化期における住居関連の儀礼を考える上で貴重なデータを提供することになった。

## (4) 出土木製品について

4号竪穴では片口付きの皿状木製品が炭化した状態で出土した。片口部分しか遺存しておらず全体の形状は不明であるが、同一形状の木製品はこれまで擦文文化では確認されていない。オホーツク文化の木製皿とは形状等に近い部分が認められるが、系統的につながるものと認定する

のは難しいのが現状である。本州の例では、弥生時代や古墳時代に片口付きの木製容器が存在するが、それらと大島2遺跡の例では形状が大きく異なっており、直接的な関連を認めるのは難しい。このように、今回の出土例については直接関連するような類例を見出すのが難しく、その系統や由来、用途などの認定は今後の課題として残された。

#### (5) 自然科学分析の結果

3号・4号竪穴で建築材として用いられたとみられる木材について、樹種同定を行った。その結果、両竪穴ともに、主柱材もしくは梁ないし柱材に用いられたと推定された炭化材に針葉樹であるトドマツ材が検出された。擦文文化で柱材の樹種が同定された例は道央部の出土資料に限られるが、いずれも広葉樹が用いられており、針葉樹が検出された例はない。道東部での出土例が他にないので結論は留保せざるを得ないが、擦文文化の竪穴住居では柱材の樹種選択に地域差が認められる可能性が高い。また、針葉樹を柱材に用いる例はオホーツク文化で認められることから、それとの関係も注目される。

ほかに、3号・4号竪穴出土の擦文土器に付着していた炭化物について、炭素・窒素同位体分析を行った。その結果、これらの炭化物の起源は主に海生生物で、C3植物・草食動物の影響はほとんど認められないことが確認された。一方で、C4植物(アワ・キビ・ヒエといった雑穀)が内容物に含まれていた可能性も認められたが、これについてはさらなる検証が必要であり、今後の課題となった。これらの同位体の分析結果は、従来の擦文文化の分析をほぼ追認するものであった。

#### (6) 成果の総括

過去の大島2遺跡の調査(1号・2号竪穴)では、オホーツク文化やトビニタイ文化との関連をうかがわせる特異な要素が確認されていた。具体的には、カマド近くへの海獣骨の配置と、トビニタイ土器の出土である。これらの点は、本遺跡の立地上の特徴とあわせて、オホーツク文化やトビニタイ文化との関連をうかがわせるものであった。また、1号竪穴建築材の樹種構成、焼失住居の出現率の高さなどについても、オホーツク文化やトビニタイ文化と関連する可能性が考えられていた。

今回の調査では、前回ほどの関連性は認められなかったものの、柱材の樹種選択や、カマドの改築、焼失住居の出現率などについて、引き続きオホーツク文化・トビニタイ文化との関係を考慮・検討する必要があることが問題点として明確になった。

一方、今回の調査によって新たな課題も浮上してきた。それは、カマドや竪穴の廃絶儀礼に関する問題である。これまで大島2遺跡で発掘された4軒の竪穴は全て焼失住居であり、いずれの竪穴でもカマド周辺で廃絶儀礼の痕跡が確認されている。このような頻度の高さや、行われた儀礼の具体的な様相については、常呂川下流域内での位置づけや他地域との比較検討が必要となる。それを踏まえて擦文文化期における竪穴廃絶時を中心とした儀礼のあり方やその背景、さらにアイヌ文化の儀礼との系統関係を検討してゆくことが、今後の重要な課題として提示された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 福田正宏・カプリルチュクM・夏木大吾・國木田大・張恩恵・ゴルシュコフM・森先一貴・佐藤宏之・熊木俊朗	4. 巻 34
2. 論文標題 ユダヤ自治州新石器時代ピジャン4遺跡出土の新資料	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学考古学研究室研究紀要	6. 最初と最後の頁 107-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kumaki, T.	4. 巻 -
2. 論文標題 An Introduction to Susuya Type Pottery Collected in the Southern Part of Sakhalin in 1924.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Circum-Pacific Archaeology: In the Memory of Igor Yakovlevich Shevkomud	6. 最初と最後の頁 243-249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ,	4. 巻 -
2. 論文標題 :	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Circum-Pacific:	6. 最初と最後の頁 100-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊木俊朗	4. 巻 -
2. 論文標題 チャシコツ岬上遺跡出土オホーツク土器・トビニタイ土器の編年試案	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 チャシコツ岬上遺跡発掘調査報告書	6. 最初と最後の頁 101-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊木俊朗	4. 巻 688
2. 論文標題 擦文文化竪穴住居跡の廃絶儀礼について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 32-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 M. Fukuda, V. Grishchenko	4. 巻 -
2. 論文標題 The Adaptation of temperate-sedentary food gatherers in the subarctic environment	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The Eighth World Archaeological Congress, Book of Abstracts	6. 最初と最後の頁 313
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 熊木俊朗	4. 巻 17
2. 論文標題 古代の海洋民 オホーツク人とその文化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本赤十字看護学会誌	6. 最初と最後の頁 79-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 熊木俊朗・夏木大吾・中村雄紀
2. 発表標題 2019年度北海道北見市大島遺跡群発掘調査報告
3. 学会等名 第21回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 千原鴻志・佐野雄三・熊木俊朗
2. 発表標題 北見市大島2遺跡3号・4号竪穴住居址出土炭化材にみる擦文文化における径級・加工法による樹種の選択利用
3. 学会等名 第70回日本木材学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 熊木俊朗・夏木大吾
2. 発表標題 2018年度北海道北見市大島遺跡群発掘調査報告
3. 学会等名 第20回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊木俊朗・夏木大吾・市川岳朗
2. 発表標題 2017年度北海道北見市大島遺跡群発掘調査報告
3. 学会等名 第19回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福田正宏・Gablirchuk, M.・國木田大・Malyabin, A.・Gorshkov, M.・田尻義了・江田真毅・夏木大吾・足立達朗・Shipovalov, A.
2. 発表標題 ロシア・ユダヤ自治州における完新世遺跡群の実態調査 2017年度調査結果速報
3. 学会等名 日本中国考古学会九州部会第78回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊木俊朗、夏木大吾、中村雄紀
2. 発表標題 2016年度北海道北見市大島2遺跡発掘調査報告
3. 学会等名 第18回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福田正宏、M.Gablirchuk、國木田大、田尻義了、A.Shipovalov、M.Gorshkov、福永将大、夏木大吾、熊木俊朗
2. 発表標題 アムール流域における考古学的調査報告(2016年度)
3. 学会等名 第18回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 熊木俊朗
2. 発表標題 紀元一千年紀前後におけるサハリンと北海道の先史文化交流
3. 学会等名 第31回北方民族文化シンポジウム 環太平洋地域の伝統と文化1 サハリン(国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 熊木俊朗編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設	5. 総ページ数 104
3. 書名 アイヌ文化形成史上の画期における文化接触：擦文文化とオホーツク文化 - 大島2遺跡の研究(2) -	



1. 著者名 秋道 智彌、角南 篤（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 西日本出版社	5. 総ページ数 112-115
3. 書名 海とヒトの関係学 海はだれのものか	

1. 著者名 熊木俊朗・高橋健・夏木大吾	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設	5. 総ページ数 109
3. 書名 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点（2） - 出土遺物の追加報告 -	

1. 著者名 熊木俊朗	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北海道出版企画センター	5. 総ページ数 321
3. 書名 オホーツク海南岸地域古代土器の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>東京大学大学院人文社会系研究科附属 常呂実習施設・常呂資料陳列館 現在調査中の遺跡  <a href="http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokoro/academic/excavation.html">http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokoro/academic/excavation.html</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	福田 正宏  (Fukuda Masahiro)  (20431877)	九州大学・人文科学研究院・准教授    (17102)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携 研究者	佐野 雄三  (Sano Yuzou)  (90226043)	北海道大学・農学研究院・教授   (10101)	
連携 研究者	國木田 大  (Kunikita Dai)  (00549561)	北海道大学・文学研究院・准教授   (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関